

# ベストピア Bestopia

小原靖夫

ベストピアは小原靖夫の  
個人誌です。

平成三十三年十一月  
第二九七号

## 私の「第九」への挑戦

9月、10月と資料の提供のような長い分量になりましたので、今月号は普通に、「第九」の季節を少し前どりして「歓喜の歌」に挑戦します。

### 1. ベートーヴェンとシラー

ベートーヴェンの「第九」は後世の音楽家たちに大きな影響を与えました。ブルックナー、ブラームス、そしてあのマーラーの合唱付き大オーケストラが生まれました。彼らはベートーヴェンを尊重しつつも何か新しい独創的な芸術を求めて作曲しています。音楽だけでなく絵画(クリムト)、文学(ロマン・ロラン)そして多くの民衆に「苦悩をつき抜け歓喜に到る」生き方、勇気を与えてきました。

その第4楽章に有名な合唱が入ります。今回はその歌詩にチャレンジします。

芸術とは人々の五感に感動を与え、今、ここを生きる生の喜びを喚起(歓喜)するものだと私は解釈しています。従って、私見を言葉で語ることはタブー視されているようです。今回はそれを知った上での挑戦です。

歓喜の歌はベートーヴェンが、生涯にわたって愛読したシラーの詩の一つ「歓喜に寄す」から引用されています。歌い出しのところはベートーヴェン作詞です。比較し

た訳を引用します。理性的に理解することは容易ではありません。シラーがこの詩を作った背景を見てみました。

### 2. シラーの生い立ち

シラー(1759-1805)の父は将校兼軍医でした。シラーは優秀な頭脳に生まれ8歳でラテン語を学び神学を目指していましたが、余りにも賢かった為に、領主カール・オイゲン公に認められ強制的に軍人養成学校に入れられてしまいます。私の想像ですが、小さい時の環境、親の影響を強く受ける幼児体験は青春期に何らかの形をとって人格形成にかかわってきます。シラーは権力の強制を忌み嫌うようになり、1776年(18歳)から「群盗」(自由と正義、権力に抗する崇高な犯罪者の物語)を書きはじめます。1781年に匿名で発表するとオイゲン公に捕まり独房に入れられ、医学書以外の著作活動を禁じられます。軍医として従軍命令も出されました。シラーにとっては限界に達し、1782年亡命をします。苦しい生活の始まりですが、著作活動に励み、2年後に「たくらみの恋」(身分の違いの恋の顛末を書いた市民悲劇)を書きます。その本がクリスティアン・ケルナー(1756-1831)の目に留まり、感動を受けたケルナーから手紙を受け取ります。生活に困窮していたシラーは、翌年(1785)ケルナーを訪ね暖かい歓迎を受け、無償の援助と著作への共感という精神的な支援を受けて、友情の素晴らしさに感動して「歓喜に寄す」を作ります。

ケルナーはシラーの死後「シラー全集」を出版するほどに彼等の友情と共感の深さ

が判ります。

この背景で詩を再読すると少し理解が深まります。

この詩にはいろんな説がありますが、ここでは素直な解釈が全体の理解の助けになります。

シラーはこの後にゲーテとの親交も深め視野を広めていきます。1792年にはペスタロッチと共にフランス革命名誉市民に選ばれています。カントの研究では後世のヘーゲルやフィヒティにも影響を与えるなど広い分野で活動した人で、ウィリアム・テルの作者でもあります。1805年召天しますが辞世の句は「ますます快活に、そしてより良く」とあります。ベートーヴェンのシラーへの共感が理解できます。

### 3. 合唱の意味について

歓喜の詩は「シラーが生まれてはじめて信頼できる友人たちにめぐり合えたと感じて作った詩でした。それを個人的な友情としないで全人類の友情を高らかに歌い上げたのが、いかにもシラーらしいことでした。」「シラーは青年時代に、封建的で自分勝手な君主によって自分の意志に反した職務と生き方を強制されたと感じて、自由を奪う土地を脱け出しました。意志の自由を得たかわりに生活の苦しさを味わうことになりました。その苦しみのつづく中で、親身な救いの手を差し伸べて友人として迎えてくれる人たちに出会うことができました。

その喜びの気持ちをあらわすために作ったのが「歓喜に寄す」という詩でした。友情のテーマにおいて『走れメロス』とつながっています。(宮下啓三先生。三田文学N0 99号 166頁)

以上の背景から合唱への理解の手がかり

がひとつ見つかりました。

「一人の友の友となるというのは何と大きな恵み、大きな幸運」「たとえ一人でもこの世に真の友と呼べる者がいるものは何と幸運なこと」この個人的な体験を通しての観喜と感謝の念に満たされたシラーが人類的な広がりをもたせたのが、ベートーヴェンの目に留まったということ。

今ひとつは第九に引用されなかったところを見てみました。

第IV節の主文の8行は次のような意味になります。

歓喜は自然を動かす強いバネ、  
歓喜こそ宇宙の時計仕掛の輪をまわす。  
歓喜は蕾から花をさかせ、  
もろもろの恒星を大空に燃えさせたせる。  
歓喜は学者の知らぬ星々をも空間(天空)  
におどらせる

第V節の後半4行は、

耐え忍べ、勇気をもって、いく百万の人々よ。

耐え忍べ。より良き世界のために  
星空の彼方にいます偉大な神は  
必ずや汝の労苦に応えてくださるだろう  
(以上の引用は、藤井義正著・『私の第九』  
26頁より) ※末尾参照

ここでの神は単数になっています。

歓喜はわれらに口づけ(赦しと愛)と葡萄(子孫の繁栄、豊かさ)を与え、死の試練を経た友を与えるというところと合わせて考えると歓喜は神と読むこともできると感じました。歓喜を自由と読み替えた訳者もいます。

次のページでは大木正純氏の訳を基本に、今の私の解釈、私の第九読みを紹介します。  
①②③④⑤⑥の番号は私が付けたものです。  
この歌詞の部分が繰り返し合唱されます。

歌い出しの所はベートーヴェンの作詞です。

おお、友よ、この調べではない！

もっと快い、

喜びに満ちた調べで歌おうではないか！

以下はシラーからの詩です。

大木正純訳

① 歓喜よ、歓喜よ、歓喜よ、  
美しい神々の閃光よ、楽園からの娘よ  
我らは燃えるように酔いしれ、  
天国に、汝の聖殿に踏み入ろう  
汝の神秘的な力は、  
引き離されたものを再び結びつけ、  
汝の優しい翼のとどまるどころ、  
人々はみな兄弟となる

② 一人の友の友となるという  
大きな幸運に恵まれた者は  
優しい女性を得た者は  
歓喜の声に和せ  
そうだ、この世にたとえ一人でも、  
わがもの、と呼べる人がいるものは！  
しかし、それができないものは、  
泣き悲しみつつこの仲間から去れ

③ すべてのものは歓喜を  
自然の乳房から飲み  
善なるものも悪なるものもすべて  
みなバラの道をゆく  
歓喜はわれらに口づけと酒を与え  
死の試練を経た友を与える、  
虫けらにも快樂は与えられ  
そして天使は神の前に立つ！

私の 70 歳の第九 解釈

歓喜よ、歓喜よ、歓喜を与えたもう神よ  
聖霊の光輝く神よ、楽園からの乙女よ  
(楽園からの良い知らせをもたらす乙女)  
我らは燃えるような喜びに満ちて  
主の聖所に踏みいります  
あなたの神秘的な力は、時が残酷にも  
引き離されたものを再び結びつけ、  
あなたの優しい翼のとどまるどころ  
人々はみな兄弟となる

一人の友の友となるという  
大きな幸運に恵まれたものは何と幸せなことか  
優しい妻を迎かえんとする者は何と幸せなことか  
歓喜の声を合わせ、主に感謝しよう。  
そうだ、この世にたとえ一人でも、  
真の友と呼べる人がいる者は何と幸せなことか。  
しかし、それができないものは、  
泣き悲しみつつ、この仲間から去れ※

在りて有るものは皆、(人も動物も植物も)  
自然の乳房から歓喜(神の恵み)を飲み、  
善なるものも悪なるものもすべて、  
みなバラの道をゆく(バラは救いと喜びの象徴)  
歓喜はわれらに接吻(赦し)と葡萄の蔓(豊かさの伝承、永続)を与え  
死の試練を経た友を与える、(キリスト・イエスを連想)  
虫けらのような取るに足りない私にも快樂  
を与え  
知性の天使は神の前に立つ！※※

④楽しく、神の多くの太陽が  
天空の見事な平面を飛ぶように  
走れ、兄弟たちよ、なんじの道を、  
英雄が勝利に赴くように、喜ばしく。

⑤いく百万の人々よ、互いに抱き合おう！  
このくちづけを全世界に与えよう！  
兄弟たちよ！星空のあなたには、  
愛する父が必ず住みたもう

⑥いく百万の人々よ、地にひれ伏すか？  
世界よ、創造の主を認めるか？  
星空のあなたに主を求めよ！  
星のあなたに必ず住みたもう

大木正純訳は 2011 年 11 月 1 日東京文化  
会館 50 周年記念フェスティバル オープ  
ニング

コンサートのプログラムから引用しまし  
た。非常に分かり易い訳だと感じました。  
右の解釈は私が今 70 歳で、第九を聞くと  
きの歌詞です。ドイツ語が分かりません  
のでこのように聞いています。

①の 2 行目、「美しい神々の閃光よ、楽園  
からの娘よ」は第九の合唱の最後を締め  
くくる  
ところでは。

②の下から 2 行は解釈が難しいです。シ  
ラーは恩人ケルナーのグループに出会っ  
て意気投合して、有頂天になっていたよ  
うに感じます。ベートーヴェンはこの孤  
独の悲しみを味わい、  
こんな惨めさはもう嫌だ。という気持  
ちをこめてトーンを下げています。

③バラはルターの紋章を参考に私流の解  
釈をしました。シラーの両親はルター派  
のキリスト教徒であったのでシラーのど  
こかにもその影響はあると考えました。

楽しそうに神々しく光る星らが  
壮大な天空（軌道）を飛び交うように  
走れ、兄弟たちよ、汝の道を、  
英雄が勝利に赴くように、喜びに満ちて。

幾万人の人々よ、わが抱擁を受けよ  
（神に抱かれて生きよう。抱かれて有れ）  
この接吻（赦し）を全世界に与えよう！  
兄弟たちよ！星空の彼方には、  
愛する父が必ずおられる。

幾万人の人々よ、地にひれ伏すか！  
世界よ、創造の主を予感するか！  
星空の彼方に主を求めよ！  
星空の彼方に、愛する父は必ずおられる。

ルターの紋章のバラの意味はこの世を越  
えた喜び、慰め、平和又は救い主を表し  
ているとのこと

最後の 2 行は今のところ分かりません。  
「接吻と酒」も解釈に困りましたが、「接吻」  
は赦しと愛としました。酒は他の訳では葡  
萄酒となっているのが多いですが、ドイツ  
語の辞書には **Rebe** は葡萄の枝とあり、  
**Reben** の変化が解りませんが酒のイメージ  
は出てこないのが困っていましたが、これ  
又、佐渡 裕さんが「日経おとなの OFF」  
の第九入門記事の中で「葡萄の蔓」と訳さ  
れていました。葡萄は子孫繁栄のシンボル、  
豊かさを表し、蔓は永続だと私は解釈しま  
した。

⑤互いに抱き合おうでもいいですが、動  
詞が受け身になっているので気になってい  
ましたら

藤井義正氏の著書に接し、同じ考えの方  
がおられることに勇気づけられ、「抱かれて  
有れ わが抱擁を受けよ！」（佐渡訳）とし、  
主語を明確にしました。

## 第九で歌われる部分

シラーの原詩は当初は 9 節でした。後に 8 節に推敲されています。

各節は主節の 8 行詩と従節の 4 行詩で構成されて 12 行で 1 節が完結する形式です。

文末のドイツ語の歌詞で第 1 節は、囲みの右に付けました I と 1 で構成されます

ベートーヴェンは 4 節までを引用しています。但し 4 節の本文は引用せず、従節の部分のみの引用です。次ページのドイツ語の囲みの前に手書きで①から⑦まで付記しましたが、それが第九で歌われる順番です。

まず、歌い出しの部分はベートーヴェン自身の作詞です。

バリトンが満を持して歌いはじめます。そして、フロイデ！フロイデ！の合唱に続いてバリトンの独唱が、I の部分を歌い、続いて I の後半 (Deine Zauber binden wieder から weilt まで) を合唱が歌います。

おお友よ、この調べではない！  
もっと快い、喜びに満ちた調べで歌おうではないか！

II - III まで独唱が歌った後に合唱はその後半部分を歌います。これが全体の前半です。

後半はテノールの独唱とともに、男性だけの合唱です。4 の後半です。

しばらくはオーケストラの演奏があり、続く合唱は I のところ、即ちシラーの 1 節の主節のところ、バリトンの歌い出しのところを合唱で歌います。

次は 1 の部分が男性合唱の後ろに女性合

唱が重なり、ゆっくりと歌われます。

次に 3、シラー原詩では III 節の後半、とても有名なところ、静かにゆっくりと祈るように。(佐渡裕さんの訳を引用)

走れ、兄弟たちよ！汝の道を  
喜びに満ち、勝利に進む英雄の如く！  
勝利に進む英雄の如く！  
喜びに満ち、勝利に進む英雄の如く！

その後も I を中心に繰り返しがあります。

I の前半と 1 の前半の組み合わせ

3 の前半と 1 の後半の組み合わせ

世の習わしが、残酷にも、引き離れた者を  
再び結びつける。あなたの優しい翼のかけ  
で、人々はみな兄弟となる！  
(2 回繰り返し)

I の後半 更に I の後半の一部

そして、フィナーレの部分に入ります。

いく百万の人々よ、わが抱擁を受けよ！  
(神に抱かれて在れ！)  
その接吻を、全世界に！  
(接吻は神の赦しと愛) (2 回繰り返し)  
兄弟たちよ！星空の彼方には、愛する父が  
必ずや住みたもう。

いく百万の人々よ。わが抱擁を受けよ！  
この接吻を、全世界に！全世界に！  
兄弟たちよ！星空の彼方に必ずや  
愛しき父は住みたもう。  
愛しき父は住みたもう。愛しき父は住みた  
もう

わが抱擁を受けよ！(神に抱かれて在れ！)  
わが抱擁を受けよ！(神に抱かれて在れ！)  
この接吻を全世界に、全世界に、全世界に  
この接吻を全世界に、全世界に、全世界に

最後の最後は一番始めに戻り

歓喜よ、歓喜よ、美しい神の輝き、  
美しい神の輝き、

楽園の乙女よ、歓喜よ、美しい神の輝き  
神の輝き！

で終わります。

歌詞の意味を知らなくても第九は感性に  
ベートーヴェンを響かせてくれます。

「第九には、つらい日々を洗い流し、愛と  
感謝に昇華させる魔力がある。曲全体が持  
つ畏敬と慈愛に満ちた力が、圧倒的な迫力  
で表現された一作」（西村雄一郎氏）

「歓喜の主題が始めて現れようとする瞬間  
に、オーケストラは突如中止する。急な沈  
黙がくる。歓喜の歌の登場へ、この沈黙が  
一つの不思議な神々しい性格を与える。実  
際、この主題は一個の神ともいえるのであ  
る。超自然的な静けさをもってひろがりな  
がら、歓喜は空から降りて来る。その軽や  
かな息のそよぎで、歓喜は悩みを愛撫する。  
苦悩から力を回復して立ち上がる心の中へ  
喜びがすべりいるとき、それが与える第一  
の感銘は情愛の深さである。」

ロマン・ロランの[ベートーヴェンの生  
涯] 岩波文庫版 p65 からの引用です。

もう一度、ベートーヴェンとシラーの接  
点に戻ってみます。

シラーがこの詩を書いたのは 1785 年(26  
歳)の時、ベートーヴェンがこの詩に触れた  
のは 1793 年(23 歳)——ベートーヴェンは  
シラーより 11 歳若い——

当時のベートーヴェンは難聴が進み、唯一  
書いたオペラ『フィデリオ』を指揮するこ  
とができず、親友とは仲違いの中、可愛が

っていた甥のカールのピストル自殺未遂事  
件が重なり、悲しみの深淵にあった。そん  
なときに、ベートーヴェンは歓喜をほめよ  
うと企て、生涯を通じて歓喜を歌おうと望  
み 1824 年(54 歳)の時に完成自の指揮によ  
って初演を成功させている。

「魂は、それが歓喜を持たぬときには、自  
らそれを創り出さねばならないほどに歓喜  
を必要とするものである」というロマン・  
ロランの言葉がベートーヴェンの生涯を一  
言で言い表わしているように感じます。

1796 年と 1800 年の間に聾疾はその暴威  
を振るいはじめた。夜も昼も耳鳴りが絶え  
なかった。そして、彼はまた腸の疾患に終  
始なやまされた。

絶望としか言いようのない深淵の底で、  
尚、光を、歓喜を求め得る力はどこから湧  
いてくるのであろうか？

私自身も耳鳴りに悩み既に 7 年になりま  
す。偉業は無いものの苦悩の心情は理解で  
きます。希望が持てない時にも希望が与え  
られたことも経験してきました。

ここに私の 70 歳の第九を語りました。  
来年はどんな第九が聞けるのでしょうか？

小原 靖夫

(次頁にドイツ語歌詞を記載)

※本月号を書いているとき、私が求めてい  
た本に出会いました。多くの疑問が解けま  
した。

藤井義正著 『私の第九』

神戸新聞総合出版センター

詳細は 12 月号に記します。

第九の歌詞とシラーの原詩との関係

I  
 Freude, schöner Götterfunken,  
 Tochter aus Elysium,  
 Wir betreten feuertrunken,  
 Himmlische, dein Heiligtum.  
 Deine Zauber binden wieder,  
 Was die Mode streng geteilt ;  
 Alle Menschen werden Brüder,  
 Wo dein sanfter Flügel weilt.

II  
 Wem der große Wurf gelungen,  
 Eines Freundes Freund zu sein,  
 Wer ein holdes Weib errungen,  
 Mische seinen Jubel ein !  
 Ja, wer auch nur eine Seele  
 Sein nennt auf dem Erdenrund !  
 Und wer's nie gekonnt, der stehle  
 Weinend sich aus diesem Bund !

I・II・IIIはシラー原詩の(1)-(2)-(3)節の主文を表します。1・3・4は原詩の各節の後半をあらわします。これに沿って和訳がされています。

III  
 Freude trinken alle Wesen  
 An den Brüsten der Natur,  
 Alle Guten, alle Bösen  
 Folgen ihrer Rosenspur.  
 Küsse gab sie uns und Reben,  
 Einen Freund, geprüft im Tod ;  
 Wollust ward dem Wurm gegeben,  
 Und der Cherub steht vor Gott.

4  
 Froh, wie seine Sonnen fliegen  
 Durch des Himmels prächt'gen Plan,  
 Laufet, Brüder, eure Bahn,  
 Freudig wie ein Held zum Siegen !

I  
 Freude, schöner Götterfunken,  
 Tochter aus Elysium,  
 Wir betreten feuertrunken,  
 Himmlische, dein Heiligtum.  
 Deine Zauber binden wieder,  
 Was die Mode streng geteilt ;  
 Alle Menschen werden Brüder,  
 Wo dein sanfter Flügel weilt.

1  
 Seid umschlungen, Millionen !  
 Diesen Kuß der ganzen Welt !  
 Brüder—überm Sternenzelt  
 Muß ein lieber Vater wohnen.

3  
 Ihr stürzt nieder, Millionen ?  
 Ahnest du den Schöpfer, Welt ?  
 Such ihn überm Sternenzelt !  
 Über Sternen muß er wohnen.

1、3、Iの混合